

「ぶんぶんひろば」における授業の実践
「保育内容・造形表現」における
「ベビー&キッズ 造形遊びDay!」
(学芸学部 子ども学科)

1. 授業の概要と目的

本学学芸学部における「保育内容・造形表現」は幼稚園教諭一種免許状もしくは保育士資格取得のための選択必修科目で、主に学芸学部子ども学科の2年生が履修する。子ども学科の大多数の学生は卒業後の進路として、小学校教諭・幼稚園教諭・保育士のいずれかを目指す。小学校教諭一種免許状と幼稚園教諭一種免許状、幼稚園教諭一種免許状と保育士資格というように、多くの学生は2つの免許・資格取得を希望する傾向にあるが、小学校教諭一種免許状のみ、保育士資格のみ、あるいは小・幼・保と3つの資格・免許取得を希望する学生も存在する。そのような状況の中で、小学校教諭一種免許状のみもしくは保育士資格のみを希望する学生以外の大多数の学生は2年生の秋に初めての実習となる2週間の幼稚園実習を経験する。本授業はその「初めての実習」を目前とした2年前期に開講される科目であり、「実践的な造形活動を通した乳幼児理解」を修学目標のひとつに掲げている。そのため、毎年授業計画の中に「乳幼児および保護者と関わる実践」を取り入れている。その実践内容として、本学の子ども・子育て支援研究センターを利用する子どもおよび保護者を行う造形活動が挙げられる。

2015年度の履修者はグループA15名(男子9名女子6名)、グループB19名(男子10名、女子9名)の計34名であった。そのうち、授業への出席状況や態度、提出物などに問題があり、参加が認められなかった者5名を除く29名が子ども・子育て支援研究センターでの実践を行った。2015年は7月13日(月)2限目(GB)と7月27日(月)1限目(GA)に活動を行った。

2. 「ベビー&キッズ 造形遊びDay!」の試み

子ども・子育て支援研究センターの「ぶんぶんひろば」は主に幼稚園入学前の0~3歳の保護者と乳幼児が利用している。そのため、活動内容もその年齢に合わせたものが望ましい。おおむね1歳3ヶ

月~2歳未満の発達として、「歩き始め、手を使い、言葉を話すようになることにより、身近な人や身の回りの物に自発的に働きかけていく。歩く、押す、つまむ、めくるなど様々な運動機能の発達や新しい行動の獲得により、環境に働きかける意欲を一層高める。その中で、物をやり取りしたり、取り合ったりする姿が見られるとともに、玩具等を実物に見立てるなどの象徴機能が発達し、人や物との関わりが強くなる。」ということが挙げられる。

これらの「つまむ、めくるなどの運動機能の発達」や「環境に働きかける意欲」、「みため活動」、「人や物への関心」を育てる活動の一つとして、多くの保育園で0歳児クラスから実践されている「シール貼り」という活動がある。具体的には、赤や青などの円形のシール(直径1.5cm~3cm)を保育士が用意した台紙の上に貼ることにより、乳幼児は何かしらのイメージを作り上げて(仕上げて)いく活動である。本授業では、毎年この「シール貼り」について学習した上で、乳幼児を対象に実践することを授業計画に入れている。

本年度は毎年行っている上記の「シール貼り」の活動に、「はさみ・のり」「感触遊び」「手形ぺったん」という3つの活動を新たに加えた。

- 「はさみ・のり」は「初めてはさみとのりを使用する子ども」を意識した活動で、長さ10cm、幅1~2cm程度の紙をはさみで「一発切り」をして学生が用意した台紙にのりを用いて貼るという活動である。手をパー・グーとリズム良く開閉し、はさみを使用することを子どもたちに教える。
- のりについては、幼稚園や保育園で使用される容器に入ったでんぶんのりを使用する。人差し指の先に少し付けて、それを紙にチョンと乗せ、接着することを教える活動である。小さな子どもはのりの中に指を深く入れて、ベタベタにしてしまう傾向にあるが、「チョン、と少しだけ、ペタッと貼れるよ。」など声かけもしていく。
- 「感触遊び」はカラフルなスライムをあらかじめ用意し、子ども達がそれらに触るなどして感触や色を楽しみながらごっこ遊びに展開するというものである。
- 「てがたぺったん」ではあらかじめ用意した台紙の上に絵の具で子どもの手形をとるという活動で、感触遊びの延長でもあり、保護者が喜ぶという利点を持ち合わせる。



写真1：子ども用はさみ



写真2：容器に入ったでんぷんのり

時間や受講人数の関係で、本年度はGBについては「シール貼り」と「はさみ・のり」の2種類の活動を取り入れ、GAについては「シール貼り」「はさみ・のり」「感触遊び」「てがたぺったん」の4種類の活動を行った。

3. ふりかえりープリントよりー

★「気づき」・「感想」より

- 子どもの手は非常に小さくて、びっくりした。筆で子どもの手に絵の具をつけると「ぎゅっ」と指が丸まったので、これが把握反射かなと思った。(M.K 女子学生)
- (容器に入った)のりを初めて見る子どもが多く、興味津々の様子だった。(S.I 男子学生)
- 0歳の子は、絵の具の中に手を入れることや、台紙に手形をつけるときに泣いて嫌がる子が多かった。(H.I 女子学生)
- 年齢によって貼ることができるシールの大きさが違うと思った。(M.I 女子学生)
- 言葉がまだ上手に伝わらなくて、どうやって教えたらいかが少し迷ってしまった。保護者との連携が大切だと感じた。(S.Y 男子学生)
- 興味・関心の方向がくるくる変わって、1つのものだけでなく、部屋全体の色々なものを持ってきて遊んでいた。(N.T 女子学生)
- 活動が上手な子、下手な子、好きな子、嫌な子、色々な子どもがいるが、どのような子とも楽しく活動ができるようになりたい。(S.M 女子学生)



写真3：導入の手遊びをする男子学生(GA：7月27日)



写真4：シール貼りをする女児。上手にシールを並べている。



写真5：本年度の新しい活動の「はさみとのり」

4. まとめ

学生たちの多くは、乳幼児と関わる経験が極めて少なく、年齢に応じた子どもの発達と能力を理解していない。実感的に子ども理解を促す実践型活動は修学目標達成のためには不可欠である。また、今回の活動では、「2歳ではさみを使い始められるのですか?」「どのようなはさみがおすすですか?」など、保護者からの質問も多く、関心の高さが伺えた。今後は、子どもの発達に応じた造形活動例や、使用画材等の紹介なども、子育て支援の一環として授業に取り入れていきたい。

(文責：学芸学部 子ども学科 小笠原文)